

## これからの 50 年に向けて

日本放射線化学会会長

小嶋 拓治



我が国における放射線化学研究者の組織として、日本放射線化学会は、1965年11月13日に発足して昨年50周年を迎えた。時を同じくして発行された「放射線化学会誌第100号記念特集」を引くまでもなく、放射線化学は、初期過程等における物質と放射線との相互作用に係る基礎研究、放射線源の開発・用途拡大、材料・生物・医療への応用と、非常に多くの領域にわたる共通基盤をなす学問となっている。改めて、放射線化学の大いなる進展をもたらしてくださった諸先輩方の弛まざるご努力に心から敬意と感謝を表します。

さて、この機に、学会の設立趣旨をたどると、学会の範囲は、放射線化学は、いわゆる化学やの化学といったものとは趣を異にするものであり、例えば初期過程などにおいては重要な物理領域を包含し、また生物作用などとも密接に関係する「放射線化学に関する物理、化学及び関連分野」の領域とされている（放射線化学 No.1, p.2）。そして、放射線化学を周辺分野との関連で研究する、あるいは、放射線の特色を利用して科学研究をする、言い換えると放射線の特異的に見るよりも自然科学の1つとして普遍的な視点でとらえる（放射線化学 No.80, p.15 一部変更）という当時の欧米にはない日本独自の基本姿勢による取り組みが進められてきた。学会創立40周年の平成18年に発行された教科書「放射線化学のすすめ（学会出版センター）」、及び放射線化学会誌第100号にこの成果及び進捗がそれぞれまとめられているように、着実にその方向に進んでいる。

これからの50年も、時の流れとともに、放射線源や測定機器類の進歩も伴って、放射線化学は常に新たな

面を拓いていくことになるが、この基本姿勢を堅持することには変わりはないだろう。ただ、世の常として範囲が広がると密度が低くなることもままあり、「放射線化学」における研究の集合体は、その共通基盤として波及範囲を拡大する一方で、集合体を形成する個々の研究がどのように連携・融合しているかが外部からも自らも次第に見えにくくなってきているのではとの危惧はある。また、東日本大震災の影響、研究・学校法人の仕分け・再編などの体制変化、また質的成果だけでなく時間（期限）が求められる環境の中、放射線化学のこれまでの足跡が今現在目立たなく翼を休めているようにも見えてしまい、その中の自分の立ち位置に自信を持ち続けることが大変であることも予想される。

これまでの50年の成果は、幾多の困難を乗り越えての普遍事実の積み重ねであり、これから50年あるいはそれ以降に、今は点に見えるものでもいずれはつながり1つの体系をなすことに違いない。研究者は、自分が放射線化学の中のどこにいて、何をすべきかを常に確認しながら、それを貫き通して進めばよいと考える。そうはいつても、処々ある激流を乗り越えるには、孤軍奮闘では大変である。そんな時こそ、表裏の顔の使い分けや人材・予算の獲得・有効活用も含めて、同志の集まりである日本放射線化学会を頼り、情報を共有して、その組織力を上手く利用すべきと考える。

また、当学会は、継続して、国内外における放射線化学の基礎あるいは応用に携わる研究者の横断的連携、放射線化学周辺の異なる学問領域との緊密なコミュニケーションの場の提供、また、将来を担う若手研究者・技術者の育成を推進して、放射線化学の量的質的な発展への環境を整える努力をする所存である。

学会員諸賢には、これからの50年に向けて、ますますのご活躍とともに、学会へのご支援、ご協力、ご鞭撻をお願い申し上げます。

For the Next 50 Years

Takuji KOJIMA (National Institutes for Quantum and Radiological Science and Technology),

〒370-1207 群馬県高崎市綿貫町 1233

TEL: 027-347-3766, FAX: 027-347-3306,

E-mail: kojima.t@beamope.co.jp